

関係各位

公益財団法人日本サッカー協会

国際サッカー評議会（以下、IFAB）から2016年4月付回状第5号をもって2016/17年の競技規則改正について通達がありました。通達自体の日本語訳は、下記のとおりです。

今回は全面的に競技規則が改訂され、改正、加筆等が多岐にわたっているため、今までの競技規則（2015/16）との対照表と日本サッカー協会の解説を別紙1のとおり作成しました。各協会、連盟等において、加盟クラブ、チーム、審判員等関係者に周知徹底を図られるようお願いいたします。

なお、これらの改正等は、国際的には2016年6月1日から有効となりますが、日本サッカー協会、各地域/都道府県サッカー協会等が主催する試合については、別紙2のとおり施行することとします。

2016/2017年競技規則の改正および国際サッカー評議会によるその他の重要な決定

第130回国際サッカー評議会（IFAB）の年次総会が2016年3月5日にカーディフで開催されました。この総会において、下記のような競技規則改正の承認やその他の重要な決定が下されました。なお年次総会の議事録は、www.theifab.comで掲載されます。

1. 競技規則の改訂- 2016/2017

年次総会では、IFAB テクニカル小委員会（Technical Subcommittee）による包括的な競技規則改訂が承認されました。これは、IFABの130年に及ぶ歴史上最も広範囲な競技規則の改訂となります。各国サッカー協会においては、新しい競技規則本の翻訳や教材の準備のために多数の作業が発生することになりますが、ご協力よろしくお願いします。

2. 「三重罰」

最も重要な競技規則改正のひとつとして、ペナルティーエリア内で攻撃側競技者の決定的な得点の機会を阻止する反則について規定した第12条の文章の変更が承認されました。

ペナルティーキックが与えられれば、それにより失われた得点の機会は事実上回復されることとなります。ペナルティーエリア内でボールをプレーしようとした結果、あるいは、ボールに向かう相手競技者に挑んだ結果、反則を犯してしまった場合、今後は、退場（レッドカード）ではなく警告（イエローカード）となります。しかしながら、“公正公平なプレー（フェアプレー）”を確保するために、ボールを手または腕で扱う、相手競技者を押さえる、押す、引っ張る、あるいは、守備側競技者がボールをプレーしようとしていない、または、ボールをプレーできる可能性がない場合に反則を犯したならば、その守備側競技者は退場（レッドカード）が命じられることとなります。

年次総会では次の文章が承認されましたが、この改正による影響については2018年の年次総会で検証されることとなります。

第 12 条 - ファウルと不正行為：決定的な得点の機会の阻止

“「得点、または決定的な得点の機会の阻止」

競技者が、意図的にボールを手や腕で扱う反則により、相手チームの得点または決定的な得点の機会を阻止した場合、反則が起きたところにかかわらずその競技者は退場を命じられる。

競技者が自分のペナルティーエリア内で、相手競技者に対して反則を犯し、決定的な得点の機会を阻止し、主審がペナルティーキックを与えた場合、反則を犯した競技者は、次の場合を除き警告される：

- ・相手競技者を押さえる、引っ張る、または押す反則を犯す。あるいは、
- ・反則を犯した競技者がボールをプレーしようとしていない、またはその競技者がボールに挑む可能性がない。あるいは、
- ・反則がフィールド上のどこであってもレッドカードで罰せられるものであるとき（例えば、著しく不正なプレー、乱暴な行為など）。

これらいずれの状況においても、反則を犯した競技者は退場を命じられる。”

日本協会の解説

これまで、ペナルティーエリア内において「決定的な得点の機会の阻止」をした守備側競技者は「退場」が命じられました。これにより、相手チームにペナルティーキック（PK）が与えられ、反則をした競技者は退場となり、且つ、次試合出場停止が課せられました（三重罰）。しかし、今回の改正により、上記条文に述べられている例外を除き、「退場」ではなく「警告」とすることで、次試合出場停止がなくなり、一つの反則に対して三重の罰を課さないこととなりました。

なお、ペナルティーエリア外での「決定的な得点の機会の阻止」をした競技者は、これまでどおり「退場」そして次試合出場停止となります。

3. “シンビン”

ヨーロッパサッカー連盟（UEFA）が、育成年代の試合を用いて、引き続き3年目となる“シンビン”の実験をすることが承認されました。2017年の年次総会において“シンビン”導入の可否について決定するため、UEFAには更なる情報提供が求められることとなります。

4. 延長戦における4人目の交代

各国サッカー協会及び大陸連盟から出された多くの要望を踏まえ、IFABは、試合の勝者が決定されるノックアウトステージの競技会における延長戦で4人目の交代を実験することを認めることとしました。4人目の交代の導入承認申請を希望する競技会主催者は、詳細の情報を得るためにIFABに連絡する必要があります。なお、この実験結果については2018年の年次総会で検討されることとなります。

日本協会の解説

2016年3月18日に開催されたFIFA理事会にて、本規則を、リオデジャネイロオリンピック2016、FIFA U-20女子ワールドカップパプアニューギニア2016、そしてFIFAクラブワールドカップ日本2016にて実施されることが承認されました。

5. 電子的パフォーマンス・トラッキングシステム (EPTS)

最新の EPTS が発表され、一定の基準作りと FIFA 品質プログラム導入に向けて更なる調査を行う必要があることが確認されました。

6. ビデオによる審判援助

サッカー諮問委員会 (Football Advisory Panel)、テクニカル諮問委員会 (Technical Advisory Panel) を含め IFAB 内で 2 年間に渡って行われた議論、加えて、他のサッカーのステークホルダーや、既にビデオ映像で審判員の判断を援助しているスポーツとの協議を経て、IFAB は試合を決定付ける状況で明らかな間違いが起きないように援助することができるビデオアシスタントレフェリー (VARs) の実験期間を設けることといたしました。

この実験の目的は、“VARs の導入によって試合の品質は向上するか?” という、重要な疑問に答えることです。この実験は、IFAB の主導の下、独立した調査機関が分析を行うことになり、2017 年と 2018 年の年次総会で分析結果が報告されることとなります。

日本協会の解説

ビデオによる審判援助は、主審が下す全ての判定を検証するのではなく、試合の結果を変えてしまうような場面など (例えば、ゴール、PK、一発退場、警告・退場の人違い) において、正しい判定を確保することを目的としています。

現在、IFAB は FIFA の技術改革部及び本件に関心を持つ世界中の競技会主催者 (各国サッカー協会やリーグ) の支援を受け、実施に向け、本年の終盤か 2017 年始めにはプロジェクトの手順や実効性が確保できるよう作業にあたっています。これらを検討する機会は、サッカーにとって素晴らしいものであり、IFAB はこうした改正や実験についての議論や主導の最前線にいられることは非常に嬉しいものです。試合とその競技規則を絶えず向上させていくため、皆さんとともに仕事をするのを楽しみにしています。

競技規則改正に関して、関心をお寄せいただきありがとうございます。何か質問やご不明な点がありましたら遠慮なくお問い合わせください。よろしく申し上げます。

国際サッカー評議会

事務局長 ルーカス・ブラッド

日本協会の解説 (IFAB からの通達に示されていない重要な改正事項について)

別紙 1 の対照表は、今回の全改正点を網羅しています。しかしながら、IFAB からの回状では、いくつかの重要な改正点について触れられていないため、以下に示します。

- 靴などの用具の交換において、その用具を正す、または取り替えるためにフィールドから離れた競技者は、第 4 の審判員や副審がその用具を点検できた場合、負傷した後に復帰する競技者と同様、ボールがインプレー中であっても主審の承認を受けた後、フィールドに復帰できる。
- キックオフは、どの方向にボールをけても良い。
- 警告/退場を伴った反則時に、その反則を受けて負傷した競技者は、フィールド内で短時間の医療的処置を受けることができ、プレーすることが可能と判断されれば、フィールドから去ることなく、そのままプレーすることができる。
- ペナルティーキックにおいて、ボールがけられる前にゴールキーパーがゴールラインから離れるなどの違反し得点にならなかった場合、ゴールキーパーは警告される。